HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学人文学会第３回大会シンポジウム記録 ことばの中の認識の違い
著者	上野，誠治; UENO，Seiji
引用	北海学園大学人文論集(61)：47-56
発行日	2016-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

北海学園大学人文学会第 3 回大会シンポジウム　記録

文化の諸相

司会	安酸敏眞氏（英米文化学科教授　キリスト教学）
パネリスト	上野誠治氏 （英米文化学科教授　言語学，英語学） 佐藤貴史氏 （英米文化学科准教授　思想史） 郡司　淳氏 （日本文化学科教授　日本近代史，軍事史） 須田一弘氏 （日本文化学科教授　生態人類学）
日時	2015 年 11 月 14 日（土曜日）14：00〜17：00
会場	豊平校舎教育会館 1 階 AV4 教室
主催	北海学園大学人文学会
共催	北海学園大学人文学部， 北海学園大学大学院文学研究科

ことばの中の認識の違い

上　野　誠　治

0．はじめに

私は，普段，言語（特に英語）を，形式的な側面から研究することが多く，どちらかというと「言語と文化」あるいは「言語と認識」の関係といっ

た問題にはあまり立ち入ることがありません。その意味では，今日のテーマである「文化の諸相」にはあまり適任とは言えませんが，私の研究姿勢に絡めて，多少なりとも皆さんに言語学や英語学に関連した話題を提供できればと思っております。

１．言語と認識

原口（2002：691）は，言語と認識の関係に関する見方として，次の 3 つを挙げています。

⑴　a．言語と認識は独立している
　　b．言語は認識に依存している
　　c．認識は言語に依存している

（1 a）は，生成文法（generative grammar）で採られる，言語能力と認知能力は共通の基盤を持たないとする立場です。次の（1 b）は，言語現象が人間の基本的な認知能力に還元されると主張する認知文法（cognitive grammar）の立場です。最後の（1 c）はいわゆる「サピア＝ウォーフの仮説」と呼ばれるものですが，言語が人間の思考や認識に影響を与える，という考え方です。この 3 つの考え方は，見方の違いです。したがって，１つが正しくて，ほかはすべて間違いである，とは必ずしも言えないものです。もちろん，対象を深く研究していく場合には，極力洗練された手法で取り組む必要がありますので，多くの場合，研究者は自らの立ち位置を決めて当該の言語現象に斬り込んでいく必要があることも事実です。

それはともかく，私の立ち位置としては，少々，いい加減ではありますが，それら 3 つの立場を含む⑵のようなものを想定したいと思います。

⑵　言語と認識の関係

つまり，言語と認識は互いに独立している一方で，相互に関係している面が多いという点も認める立場です。ここで言う社会的要因としては，教育，職業，社会階級，年齢，性別などが挙げられます。また，文化的要因としては，労働者階級文化や黒人文化などがあります[1]。例えば，⑶はそのような要因が言語表現に映し出されたものです（Hughes & Trudgill（1987：20），田中・田中 2015：51）[2]。

⑶　a．Look at them animals! (＝ Look at those animals!)
　　b．She tired. (＝ She is tired.)
　　c．She don’t never go nowhere. (＝ She doesn’t go anywhere.)

２．サピア＝ウォーフの仮説[3]

次に，言語が認識のあり方に影響する場合を考えてみたいと思います。

---

[1] 以下，認識には人間の思考や文化も含まれるものとする。

[2] 括弧内が標準英語の表現。

[3] 中島・瀬田（2009：141）による定義は以下の通り。
「英語圏において一般に，米国の学者ウォーフ（B. L. Whorf）の研究とサピア（Sapir）の主張と結びつけて考えられている概念で，人が話す言語の意味構造が，彼らの住む世界についての概念の形成の方法を決定する，あるいは制限する，というもの。」

これは，20 世紀前半にアメリカ先住民言語の研究から登場した仮説です。例えば，アパッチ語では，「泉の水がしたたっている」ことを「水，あるいは泉としての白さが下方に動いている」と表現するそうです(ピンカー 1995：80)。当時の研究者は，アメリカ先住民が自分たちの英語とは異なる話し方をすることから，その考え方も異なる，と考えたわけです。また，エスキモー語には雪を表す語彙が豊富にあると言われますが，それもエスキモー語がその話者に，英語話者とは違った方法で雪を細かく分類するように仕向けている，と考えたのです。

また，ガソリンの空き缶（empty gasoline drums）に関する次のような話があります（ピンカー 1995：80)。これは，ウォーフが防火エンジニアの仕事をしていた時の体験に由来するものですが，あるとき作業員がガソリンの空き缶のそばで煙草を吸ったところ引火して火事になったそうです。作業員は英語の empty が「空っぽの，何も入っていない」という意味であることから，ガソリンが入っていない，すなわち危険がない，と判断して煙草を吸ったわけです。したがって，火事の原因は「空っぽの(empty)」という言葉の意味にあるというのです。しかしながら，気化したガソリンが充満しているドラム缶と何も入っていないドラム缶は表面上は同じに見えるわけですから，作業員を欺いたのは，英語ではなく作業員の目であるとも言えます。したがって，必ずしも言語が認識を規定するということにはなりません。

3．表面的な違いと本質的な違い

言語が違えば，その使い方も違うことを示す別の例を考えてみます。確かに，言語の違い，または地域や文化の違いは，言語の多様性を産み出しますが，それは主として語彙（vocabulary）や語用論（pragmatics）に反映するものであり，言語の仕組みそのものにはほとんど影響しません（平野 2007：110)。たとえば，日本語の「おはよう」は，「こんにちは」や「こんばんは」などとの相対関係で適用範囲が決まりますが，タガログ語の

Magandang umaga は絶対時間によって決められており，午前12時までしか使われないそうです。しかし，挨拶表現それ自体は普遍的なもので，言語の違いによって，その使い方が変わるだけとも言えます。

次に，言語の語順について考えてみます。よく日本語は，結論を明確にしない言語である，という言い方をされることがあります。例えば，その結果として，否定の助動詞が文末に来る，などとも言われます。一方で，日本文化について論じるときも，日本人は何事も曖昧にする傾向がある，などと論評され，日本語と日本文化の関連性が話題にされます。しかし，日本語と同じ基本的な語順（SOV）を採る言語が，すべてそうだというわけではありません[4]。日本語で助動詞が文末に来るというのは，日本語話者の「使い方」に過ぎませんし，そのような言語間の表面的な違いは，文化とはおそらく無関係です。つまり，表面的な違いと本質的な違いは区別されなければなりません。

世界には約6,000もの言語があると言われますが，主語，動詞，目的語からなる基本的な語順について，理論的には6通りのタイプが考えられます[5]。動詞句を構成する動詞と目的語の語順のみに注目すると，OV型の言語とVO型の言語しかありません。

(4)

OV型の言語	VO型の言語
SOV	SVO
OSV	VSO
OVS	VOS

このような語順に関する言語の多様性は，生成文法では，動詞句の主要部

---

[4] SOVとは主語（Subject），目的語（Object），動詞（Verb）を表す。

[5] 平野(2007：114)によると，SOV型の言語が約45%，SVO型が約35%，VSO型が約18%を占めると言われ，この3タイプでほぼ全言語（98%）が網羅される。

(head) の位置が普遍文法 (Universal Grammar, UG) におけるパラメータ (parameter) が取る値の違いとして説明されます。英語は主要部先端 (head-initial) 型，日本語は主要部末端 (head-fianl) 型の言語に分類されます。このように，語順の違いに関しても，実際には表面的な違いに過ぎないということがご理解頂けるかと思います。

4．言語の機能：範疇化

言語の働きには，基本的に，①情報の伝達と②範疇化 (categorization) の 2 つがあります。1 つ目の情報の伝達については説明する必要はないと思いますが，2 つ目の範疇化とは，連続的な身の回りの世界を，各言語に固有の仕方で非連続的な単位に恣意的に切り分けることを意味します (阿部 2001：10 ff)。

(6) a．兄と弟　　brother
　　b．あし　　foot (足)，leg (脚)
　　c．papillon　　butterfly (蝶)，moth (蛾)
　　d．Geschwister　　brothers and sisters (兄弟姉妹)
　　e．おば　　aunt (伯母，叔母)

日本語では，「兄」と「弟」を年齢で区別しますが，英語ではどちらも brother という語で表されます。必要があれば，elder brother, younger brother などのようにして区別をします。逆に，日本語では「あし」で表されることが，英語や漢語では「あし」の部位によって foot と leg，「足」と「脚」とで使い分けなければなりません。フランス語の papillon は「蝶」と「蛾」の意味が含まれますが，英語は別々の語で表現します。ドイツ語の Geschwister は日本語の性別を区別しない「きょうだい」に相当します[6]。

[6] 英語にも兄弟姉妹を表す語として sibling がある。

日本語の「おば」は英語では aunt に対応しますが，漢語では姉妹の区別が「伯母」と「叔母」として区別されます。

このような言語の恣意性（arbitrariness）は人間言語の特徴の１つとされますが[7]，人間が言語によって世界を恣意的に範疇化するということは，換言すれば，言語が認識を規定していることにもなります。反対に，言語間の類似性を示すような言語事実があります（影山ほか 2004：40）。

(7)　MORE IS UP; LESS IS DOWN

Our income rose last year.	去年は給料が上がった。
Their income fell this year.	今年は給料が下がった。

HAPPY IS UP; SAD IS DOWN

Our spirits rose.	意気が上がった。
His spirits fell at the news.	ニュースを聞いて気分が落ち込んだ。

この例が示すように，英語と日本語で，認識が類似する比喩で表現されることがあります。すなわち，給料などの上げ下げや多い少ないが，「上」（rose，上がった）と「下」（fell，下がった）で表されています。また，幸福の度合いについても同様に「上」（rose，上がった）と「下」（fell，落ち込んだ）で表されています。このような言語事実は，恣意性の反例となるものですが，すべてに当てはまるわけではありません。例えば，痛みや甘みが増しても，「*痛みが上がる」や「*甘みが上がる」とは通常言えません[8]。

また，直接的・具体的概念が抽象的状態の変化に拡張されるような場合にも，言語間に類似性が見られます（Lakoff & Johnson 1999: 50ff）。

---

[7] 語（word）は，音と意味を持つ記号（symbol）であり，その関係には必然性がないことを言語の恣意性という。

[8] 星印（asterisk）は，統語論の分野において，非文法的（ungrammatical）であることを示す。

(8)　a．温かく迎える

　　b．They greeted me *warmly*.

(9)　a．まったく同じではないが，近い。

　　b．These colors aren't quite the same, but they're *close*.

(10)　a．話が見えました。（おっしゃることは分かります。）

　　b．I *see* what you mean.

上記の(8)における日英語共通の具体的な「あたたかさ」は抽象的な「愛情」を，(9)の距離的な「近さ」は「類似」を，(10)の「見えること」は「分かること」をそれぞれ表します。いずれも，具体的概念の抽象的概念への拡張と捉えることができます。

反対に，抽象的概念が具体的概念で表されることもあります。次の例は時間という抽象的なものを空間という，より具体的なもので置き換えた表現になっています。

(11)　a．I'm going to visit my sister.

　　b．She's going to have a baby in July.

be going to を使った表現は，近接未来を表しますが，よく見ると「行く」という意味の go の現在分詞が用いられて進行相を表しています。つまり，「妹を訪ねる」「７月の出産」に向かって進んでいる最中であることを本来表しています。人間にとっては，空間移動の方が時間よりも身近であるため，いわゆる「空間のメタファー」を使って表現しているわけです。なお，be going to は使い込まれた結果として，一種の近接未来を表す助動詞的な表現にいわば「格上げ」されていますが，これは文法化（grammaticalization）と呼ばれる現象を指します。その言語化ないしは記号化した結果が，I'm gonna visit my sister.などに見られる gonna という形態です。

５．ま　と　め

言語と認識の関係を考えるとき，両者が無関係であるとか，一方が他方に依存していると論じるだけでは，言語を総体的に捉えることはできないと思います。もちろん，学問研究としては自らの立ち位置を明確にする必要があるでしょうが，たとえそうであっても，対立するようなものではないはずです。実際，今日お話しした事例からもお分かりのように，言語にはさまざまな側面がありますので，必ずしも一方が正しく，他方が間違いということにはなりません。立場によって得意分野と不得意分野がありますが，それを互いに補い合うことで，むしろ言語の全体が見えてくるのではないかと考えます。

以上をまとめますと，言語と認識の関係と言っても，言語には平野(2007)が言うように，「使い方」の側面と，「仕組み」の側面があります。その場合，前者は認識と相互に関係することが多いですが，後者は直接的にはあまり関係ありません。そして，重要なことは，この二つを区別するべきだという点です。

また，言語を研究する場合も，単に表面的な違い（多様性）にのみ囚われず，言語の本質（普遍性）にも目を向けるべきだと思います。認識の違いは言語の「使い方」すなわち語彙や表現の多様性を産出します。異文化理解の重要性が生じる所以です。他方，言語の類似性・普遍性の探究は，使用する言語は違えども，人間は世界をどのように認識するのか，また，そのような人間とはどのような存在なのか，という言語学あるいは人文学の究極の課題（テーゼ）に繋がるのではないかと考えています。

参 考 文 献

阿部　宏（2001）「言語と認知」（タッド・ホールデン，阿部　宏・編『記号を読む ── 言語　文化　社会 ──』仙台：東北大学出版会.）

原口庄輔（2002）「右と左 ── 言語文化的視点から」『東西言語文化の類型論特

別プロジェクト研究成果報告書 5-2』筑波大学.

平野尊識（2007）「『言語と文化』の関係を考える」『異文化研究』第 1 号．山口大学.

Hughes, Arthur and Peter Trudgill (1987) *English Accents and Dialects: An Introduction to Social and Regional Varieties of British English*. London: Edward Arnold.

影山太郎，ブレント・デ・シェン，日比谷潤子，ドナ・タツキ(2004)『First Steps in English Linguistics　英語言語学の第一歩』第 2 版．東京：くろしお出版.

Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh*. New York: Basic Books.

中島平三，瀬田幸人・監訳（2009）『オックスフォード言語学辞典』東京：朝倉書店.

ピンカー，スティーブン（1995）『言語を生み出す本能（上)』（椋田直子・訳）東京：NHK ブックス.

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』東京：岩波新書.

田中春美，田中幸子・編著（2015）『よくわかる社会言語学』東京：ミネルヴァ書房.